

ただゆき  
**本多忠鵬**  
 (1856~1896/西端)



1 わずか10歳で西端藩の第二代藩主に

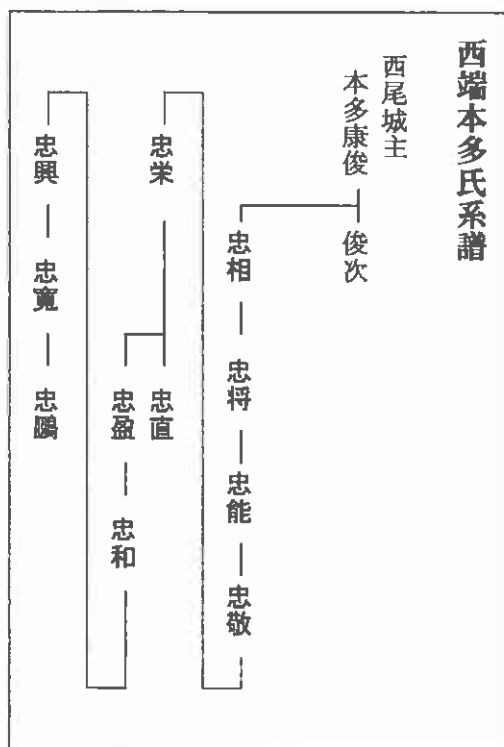
わずか10歳で西端藩の第二代藩主になった本多忠鵬は、安政3年(1856)、西端藩初代藩主の本多忠寛の子として生まれた。ときは幕末維新の混乱の真っ只中、時代の波に翻弄されながら、明治4年(1871)には、廃藩を迎えたのである。

それでは、西端領主から始まった西端藩とはどのように生まれたのであろうか。

2 西端領主の初代は、西尾城主二男の本多忠相<sup>ただすけ</sup>

西尾城主本多康俊の二男忠相は、大阪夏の陣に、父康俊、兄俊次と共に二代將軍徳川秀忠に従って出陣し、戦功をたてた。その行賞として、元和2年(1616)、はじめて碧海郡西端村(現 碧南市)八百二十八石、城ヶ入村(現 安城市)百七十二石の合わせて千石の石高(領地)を与えられた。

これによって、西端本多氏による知行の基が開かれた。ただ、西端村に領地を得たが、旗本として江戸に住まいし、江戸城勤務であった。



3 二代目忠将<sup>ただまさ</sup>から九千石の旗本に

忠相はその後、下総国・上総国(現千葉県)、碧海郡、武蔵国(現東京都)で加増を受け、八千石の旗本となった。

二代目忠将は、天和2年(1682)、下野国(現栃木県)、上野国(現群馬県)で千石加増され、合わせて九千石となり、幕府旗本中で筆頭の序列となった。以後九代目まで九千石の知行が続いた。

4 十代目忠寛<sup>ただひろ</sup>が西端藩の大名に

九代目の忠興(ただおき)の後を次いだ十代目忠寛は、嘉永6年(1853)、ペリーが来航すると、家禄が万石に足りなくても藩屏の任(幕府を守る任)を担当して羽田表品川台場へ出兵した。

更に元治元年(1864)、水戸天狗党の乱が起こると、忠寛は志願して鎮圧に参加した。この役の行賞として、同年12月新たに伊豆国で九百五十石が加増され、合計一万五百石余となって、大名の列に加えられた。

藩名は本多家が最初に賜った領地西端村の名をとって西端藩とされた。

## 5 大政奉還を迎え、勤王尊奉を誓う

慶応2年(1866)、父忠寛の隠居により、忠鵬は10歳で家督を相続した。この頃の国内は、勤王佐幕論の煮えかえるような騒ぎの真っ只中であった。

翌慶応3年(1867)10月には、大政奉還が行われ、忠鵬も年少の大名として、家臣に諮問の上進退を決せざるを得なかった。尾張藩の如き親藩でさえ、勤王方に転身して、西端藩へも勤王を説き勧めてきた。忠鵬は家臣の勧めもあって、慶応4年(1868)2月、勤王尊奉の証書を出している。忠鵬12歳のときである。

## 6 家族や家来を連れて西端村に初めて住む

同年4月、忠鵬は江戸の形勢危ないと見て、家族、家来の大部分、総勢118人の一隊で、品川からイギリスの蒸気船に便乗して大浜港へ上陸し、西端村へ移住した。西端藩といいながら、藩主以下家臣が西端村に住んだのは、これが初めてである。一行は、西端陣屋や応仁寺、庄屋宅等に分宿した。

忠鵬は、着村早々領内5か村の庄屋に命じて農兵を募集し、家臣を西尾藩へ通勤させて、武術、特に洋式調練、鉄砲操法を学ばせた。旧字の調練の松林を伐り開いて練兵場を設け、応募してきた農兵に洋式調練を習技させた。

## 7 西端藩知事(13歳)→西端県知事(15歳)→政府の官吏(15歳・子爵)

明治元年と改元されたこの年9月、忠鵬は京都へ上洛し、天皇に伺候(参上し、ご機嫌を伺う)た。そして、勤王誓約の旨を言上してきた。

翌明治2年(1869)6月、版籍を明治政府に奉還すると、忠鵬は13歳で西端藩知事に任命された。忠鵬は住んでいた陣屋の南隣の民有地を買い上げ、そこに藩庁(後に県庁)を建造した。

明治4年(1871)7月、廃藩置県令が布告され、西端藩は西端県の名に改まり、忠鵬の西端藩知事も西端県知事に改められた。

更に同年11月、県治条例が發布され、西端県は廃止になり、額田県に組み込まれることになった。県知事忠鵬も免ぜられて、東京府貫属(東京府の管轄下)になり、上京して小石川の元の屋敷に住むことになった。

これで忠鵬も明治政府の一官吏に転身し、華族に列して子爵に叙せられた。しかし、経済的にはあまり厚遇を得なかった。

## 8 転変の人生を思いつつ、西端村で死去

明治28年(1895)、39歳になった忠鵬は病気になり、西端村へ来て療養生活を送った。しかし、翌年、名古屋市愛知病院で亡くなった。そして、西端栄願寺で葬儀を行い、後に康順寺へ埋葬された。

激動の時代に10歳で家督を継ぎ、わずか5年の間に藩主→藩知事→県知事→官吏(子爵)と、めまぐるしい人生であった。忠鵬の遺品として、旧家臣長谷川氏宅に忠鵬作筆の漢詩屏風が遺されている。忠鵬の死去の前年に詠まれたものである。内容は、武士の時代を懐かしむものとなっていて、転変の人生を送った忠鵬の気持ちがうかがえる。

現在では、忠鵬の子孫は確認されていない。

◆もっと知りたいなら

・『本多忠鵬』

(平20季刊誌『みどり』杉浦明)